

「高声念仏」について

金子寛哉

浄土教における高声念仏についてはこれまでも幾つかの書物及び辞典等に紹介されている。今最近におけるその主な物を示すと左のようになる。

- (1) 『仏教大辞彙』一二〇〇～一二〇〇一頁 大正五年刊
- (2) 『望月仏教大辞典』一〇六二頁 昭和八年刊
- (3) 望月信亨著『中国浄土教理史』三三八～九頁 十七年刊
- (4) 塚本善隆著『唐中期の浄土教』二四〇・二六一～五頁
- (5) 関口真大著『達磨大師の研究』二九五～三〇〇頁
- (6) 大谷旭雄稿「永観における浄土教思想形成の一面」（日本仏教第二六号収）三三頁 昭和四二年刊

- (7) 服部英淳著『浄土教思想論』一八二頁 昭和四九年刊
 - (8) 恵谷隆戒編『新浄土宗辞典』二二三頁 //
 - (9) 『浄土宗大辞典』第一巻、四〇六頁 //
- 等である。これらの外にもあるかと思うが、今は私の参照し得たものをほぼその刊行年時の順に並べて見た。これ等の文献に説く所によつて高声念仏の源流、流伝、その思想的な変

遷、分濟等についてはおよそ理解出来る。勿論、これ等の点についてもまだ検討を要する問題は含まれていると思われるが、それは他の機会にゆずり、今回このテーマを取りあげたのは次のような理由によつてゐる。即ち、これらの文献中の幾つかによると『業報差別經』の説として、高声念仏すれば十種類の功德利益が得られると説くが、このことについて少しく検討して見たいと考えたからである。

前述した文献(1)～(9)によつて高声念仏の十種功德を整理して見ると次のようになる。

(イ) 慈恩

(ロ) 法照

(ハ) 燉煌本

「阿弥陀経通贊」	「五会念仏誦経観行儀」	「達摩禪師観門」
一能排睡眠	第一能排除睡障	一者不聞惡声
二天魔驚怖	第二動振天魔界	二者念仏不散
三声遍十方	第三声遍十方界	三者排去睡眠
四三塗息苦	第四三途幽苦息	四者勇猛精進
五外声不入	第五無令外声入	五者諸天歡喜

六心不散乱 第六妄念心無散
 七勇猛精進 第七勇猛勤精進
 八諸仏歡喜 第八諸仏皆歡喜
 九三昧現前 第九能入深三昧
 十往生淨土 第十臨終淨國蓮華座
 (淨全五・六 (正・八五・一二五
 〇三頁・下) 九頁・c)

(c)延寿 (d)守倫 (e)永観 (f)良栄

「万善同帰集」 「妙経科註」 「往生拾因」 「法事讀私記見聞」
 一能排睡眠 一能排眠 一能遣睡眠 一能遣睡眠
 二天魔驚怖 二天魔怖懼 二天魔驚怖 二天魔驚怖
 三声徧十方 三声徧十方 三声徧十方 三声徧十方
 四三塗息苦 四三塗息苦 四息三塗苦 四息三塗苦
 五外声不入 五外声不入 五外声不入耳 五外声不入耳
 六令心不散 六令心不散 六令心不散 六令心不散
 七勇猛精進 七勇猛精進 七勇猛精進 七勇猛精進
 八諸仏歡喜 八諸仏歡喜 八諸仏歡喜 八諸仏歡喜
 九三昧現前 九三昧現前 九諸仏歡喜 九諸仏歡喜
 十生於淨土 十生於淨土 十定生淨土 十定生淨土
 (淨全六・七 (正台灣四八・(淨全十五・三 (淨全四・六
 六三頁・下) 一八三頁) 八五頁・下) 二八頁・下)

今右に示した中の(イ)(ロ)(ハ)については、最初に示した参考文献の(1)(2)(3)(4)及びそれを受けた(6)(7)(8)において既に早く

「高声念仏」について(金子)

より紹介されている。(イ)については関口氏の著『達磨大師の研究』(5)によつて、燉煌文書中より見出され紹介されたもので、(9)の『浄土宗大辞典』にはこれも勘案しながら述べている。しかし(ロ)については先に示した(1)より(9)までの文献に関する限りでは見られなかつたように思う。

私がこのテーマを検討しはじめてから気づいた中に、徳川時代の延宝八年(一六八〇)に背東比丘任生の著わした『高声念仏十德纂註』(貞享二年刊・正大図書館)、及び『高声念仏十德鈔随筆』(享本・龍大)の二書のあることを知つた。後者は見ることが出来なかつたが、前者はその巻末に

入帝大小十六葉、于時元禄十丁丑天

季春中旬 於三縁山書之畢 亮斎花押

と署名された丹念な書き込み本である。この書によると、

然、恩大師小経通贊、覚禪師万善同帰、倫法師妙経科註、観律師往生十因等並引業報差別經十利同勸嘉名高音声一路、(二二)とある。この中の恩大師は先に示した(イ)、覚禪師は(二)、観律師が(ロ)であることは言うまでもない。所で残つた「倫法師妙経科註」の部分を見ると、その書込に「倫法師、妙科註一上序、妙経科註十卷文也、出今一之下五十六丁」と記されている。『仏書解説』(十、二十八頁)によると、

妙法蓮華経科註 十卷(或は八卷)

(別名、法華経科註、科註妙法蓮華経、倫註) 宋守倫撰、明法濟

「高声念仏」について（金子）

考訂、延宝八年刊（正統・一・四八・二一四）。

となつてゐる。これを便りに原文を見ると、現行本では第一巻ではなく第二巻に入つてゐる。従つて纂註の書込の作者亮斉が見たのは現行本ではなく、恐らく八巻本であつたものと推測される。この妙経科註の著者守倫の伝については不明であるが、しかし宋代の人であることだけは確認されている。

所で、この高声念仏十種功德を説く依り所とされる『業報差別経』についてであるが、最初に示した文献の(4)(5)(6)に於ても既に指摘されているように、現存する『仏為首迦長者説業報差別経』一卷（隋法智訳、正・一・八九一―五頁）には、念仏の十種功德について記されていない。しかし、このことについてでも前述した『高声念仏十德纂註』には既に指摘されている。即ち、

謹尋^{チルム}高声念仏十德、諸師同言^ツ業報差別経^ノ所説^ト也……予一日偶考^ニ二藏本^一無十種文……庸愚^ニ迷有^レ無難^レ明、恐^レ藏本脱文^ハ乎、雲棲^ニ曰^ク於^ニ三藏本^一反有^レ参差^ハ更須^レ檢^ル異本^一、且又別生^レ経文^ハ歟、

と述べてゐるので、これらの点から、この十種功德が『業報差別経』にないことは、既にこの時点において確認されていたことが解る。それでは現在伝えられている『業報差別経』の念仏十種功德は一体どのように考えるべきなのであろうか。この点について今ここで考え得るのは次の二つの方向である。即ち、第一は『纂註』を代表とする説で、現存はしな

いが当時行なわれていた他の『業報差別経』があつたのではないかと言ふ推測である。第二は『業報差別経』に仮託して当時一般に言い慣わされてゐたものを取りまとめたものではないかと言ふ憶測である。

この中、第一は現在の所それに相当する他の經典でも発見されない限り事態は進展しないので、一応可能性として置いて置く。次に第二の方向で今少し論を進めて見たいと思ふ。

ここで今一度先に述べた十種功德を説く(イ)(ロ)の表にもどつて見たいと思ふ。この中の(イ)には著作者に関する問題があるので、一応おき、(ロ)の二つは唐代のものである。そして(二)(三)の二つは宋代のもと言ふことになる。ここで注意されるのは、(ロ)は十種の功德の内容は同じであるが、その順序に不統一な面が見られ、また一方は「高声」と言い、他方は「大声」と言う。更に各項の表現にもそれぞれ異りが見られ、尚かつ、この二つではまだ『業報差別経』に云く、と言ふ文が見られないことである。これが見られる最初のもは宋代延寿の『万善同帰集』の文であつて、それ以後のものは全てこれを踏襲してゐるのである。従つて、十種功德の意味内容は同一であつても、唐代には『業報差別経』によるとは言われないで、宋代に到つてはじめてこれが言われるようになった、と考えることが出来るのではないかと思ふ。

所で、この『業報差別経』とは一体どのような經典なので

あろうか。現存する經典の内容について少しく考えて見よう。この經はその最初に「善惡の業による報いの差別を説く」ものであるとあつて、種々の業行をあげ、それに対する報いにもまた種々の差別を示している。ただこの中で今の問題に関連して注意を引くのは、種々の業によつて得る報いの中に、十種の功德として説かれるもののあることである。即ち、「若し衆生有りて」①礼仏塔廟、②奉施宝蓋、③奉施繒幡、④奉施鐘鈴、⑤奉施衣服、⑥奉施器皿、⑦奉施飲食、⑧奉施靴履、⑨奉施香華、⑩奉施燈明、⑪恭敬合掌、等の行ないをすれば、それぞれ「十種の功德を得る」とし、これらの十一種の功德行については遂一細説しているのであるが、それらの十種の利益の中に「命終生天」「速証涅槃」等が多く共通して見られる。これは、今の「高声念仏十種功德」の「十、生於淨土」と関連しないこともないが、それ程の必然性は見られない。ただ一致するのはその功德の数を十種とする点だけである。このような観点から今一つ考えられるのは『業報差別經』の異訳と思われる『分別善惡報應經』二卷である。この經に於ても今と同じ功德利益を挙げている。しかし、念仏の十種功德そのものは見られない。ただ注意を引くのは種々の行に對する功德として数えられる中に今の高声念仏の十種功德と類似するものが幾つか見られることである。今それらの主なものを示すと、

「高声念仏」について（金子）

○人天歡喜（如来合掌礼拝）○声誉遐布（施塗香供養如来之塔）○命終生天（如来合掌礼拝）○禪定成就（比丘在林野中寂靜而居）○心不散乱（如来塔布施傘蓋）○遠離三塗（如来塔布施傘蓋）○往生十方淨土見仏（如来塔施花供養）等である。行はそれぞれ異なるのであるが、その功德として数えられる徳目の中には今見た如きものがあるのである。しかし、高声、若しくは大声の十種の功德として数えているものは見出されない。

以上、幾つかの方向からの検討の結果、今ここで暫定的な推論としてまとめると、唐代の善導の礼讃、懷感の『群疑論』の念仏三昧説等を経て、慈愍、法照あたりまでに次第に盛んとなつた称名念仏行を推し進めるために、『業報差別經』の十種功德の説にならつて、唐末期頃に誰かがまとめて示されたものではないかと考えられる。疑似經の線では今後も検討を進めて行き度いと考えている。

1 『達摩禪師観門』の文は、正蔵に収載するのはスタイン本の二五八三番である。この他にスタイン本の二六六九号には「大声念仏得十種功德」とあり、前者と殆んど同じである。尚日本のもので十種功德を述べるのは上記の外に懷音の『諸家念仏集』卷三（浄全十五・六五一〜二頁）もある。

2 正蔵一・八九一頁c。